

岐蘇林多

目次

- 學術
養成苗木に對する苗圃面積算出公式に就て
- 研究
渡鮮一年有半
- 隨學
琉球アルプス山嶺より
- 紀行
御料林視察記
- 雜報
學校便り
大會記事
寄宿舎便り
會員消息
其他

大正七年二月廿五日 第壹百號 每廿五日發行 明治四十四年六月十四日(第三種郵便物認可)

生徒募集廣告

來四月本校第一學年ニ入學セシムベキ生徒約五十名募集ノ手續左ノ通り
大正七年二月 長野縣立木曾山林學校

○入學手續

本校ニ入學セントスルモノハ入學願書ニ履歷書、戶籍謄本及体格検査書ヲ添へ來三月廿日迄ニ差出スベシ其様式左ノ如シ

入學願書(用紙美濃紙)

御校へ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書、戶籍謄本及身体検査書相添へ此段願上候也
年 月 日 某儀

何府縣何郡市町村何番地居住(寄留ナラバ寄留地ヲモ記スベシ)
何府縣族稱誰子弟
入學志望者 何 某◎

同上
右父母後見人 何 某◎

長野縣立木曾山林學校長七宮純雄殿

履歷書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱戶主
又ハ誰子弟
寄留地、何府縣何郡市町村番地
何 某◎
生年月日

定價 三錢

學業

一、何年何月ヨリ何校ニ於テ何年修業又ハ卒業(證書ノ寫ヲ添フベシ)
二、何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就テ何學ヲ修ム等

賞罰

一、何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞又ハ罰ヲ受ケ
右之通り相違無之候也
年 月 日

身体検査書

本籍、何府縣郡市町村番地族稱
寄留地、何府縣郡市町村番地
何 某
生年月日

- 一 体格 一 身長 一 体重
- 一 胸圍 一 中心視力(色盲) 一 聽力(耳疾)
- 一 痘 一 呼吸器 一 神經系
- 一 皮膚 一 言語
- 一 既往現在ノ疾病又ハ畸形 一 四肢運動障害ノ有無

右検査候處相違無之候也
年 月 日 検査 住所
何學校醫又ハ醫師 氏名◎

尙詳細ハ本校ニ承合セラルベシ

注意、本年ヨリ入學試驗期日ハ四月一日ニ變更セリ

養成苗木に對する苗圃面積
算出公式に就て (承前)

函山生

今前述の式を總括して一目の下に瞭然たらしむれば次の如し

$$F_0 = \frac{M}{m} \dots\dots\dots (1)$$

$$F_1 = \frac{M \times E \times K \cdot p \cdot R \cdot P_0}{S_1} \dots\dots\dots (2)$$

$$F_2 = \frac{Z_1 \times R \cdot P_1}{S_2} \dots\dots\dots (3)$$

$$Z_n = Z_2 \times R \cdot P_2 (1 - P_a) \dots\dots\dots (4)$$

$$Z_n^2 = Z_2^2 \times R \cdot P_2^2 \dots\dots\dots (5)$$

$$F_k = n_0 F_1 + n_1 F_1 + (n_2 + P_a) F_2 \dots\dots (6)$$

$$F = (n_0 F_0 + n_1 F_1 + (n_2 + P_a) F_2) \dots\dots (7)$$

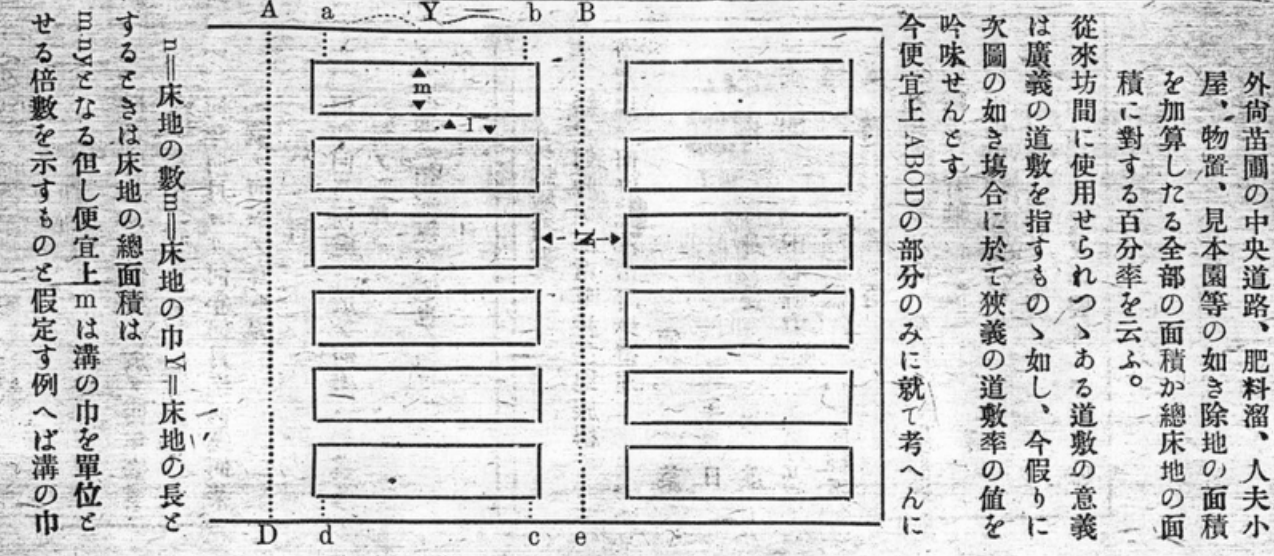
$$(1 + K) \dots\dots\dots (7)$$

$$F_a = \frac{F}{Z_n} \dots\dots\dots (8)$$

以上各式の符號の意味を説明すれば次の如し

- F₀ 播種床の面積 F₁ 第一回床替床の面積
- F₂ 第二回床替床の面積
- n₀ 播種床の据置の年數
- n₁ 第一回床替床に据置の年數
- n₂ 第二回床替床に据置の年數
- M 播種せんとする種子の量
- m 一坪當りの播種量
- E 種子一合の粒數

- K, P 種子の發芽率
- R, P₁, R, P₀ 發芽苗の殘存率
- R, P₂ 第一回床替苗の殘存率
- R, P₂ 第二回床替苗の殘存率
- S₁ 第一回床替苗一坪當り本數
- S₂ 第二回床替苗一坪當り本數
- Z₁ 第一回床替苗の本數
- Z₂ 第二回床替苗の本數
- Z_n 山行苗の本數
- P_a 劣悪苗木率
- F 所要の苗圃面積 (毎年の播種量川合に對する)
- K 道數率
- F₀ 山行苗木を毎年養成せんとする場合に於ける所要の苗圃面積
- F₁ 毎年養成せんとする山行苗木の本數
- FK 所要の床地面積 (毎年の播種量川合に對する)



外尚苗圃の中央道路、肥料溜、人夫小屋、物置、見本園等の如き除地の面積を加算したる全部の面積が總床地の面積に對する百分率を云ふ。
從來坊間に使用せられつゝある道敷の意義は廣義の道敷を指すものゝ如し、今假りに次圖の如き場合に於て狹義の道敷率の値を吟味せんとす
今便宜上 ABOD の部分のみに就て考へんに

を一尺とし床の中を三尺とすれば m=3 となる
次に溝の數は床の數より一つ丈け多きを以て (n+1) となる然るに溝の中は單位即ち一と見做したるが故に abcd の部分に於ける溝の面積は (n+1) y となる次に床地に直角に走る小徑の巾を z とするときは Aabcd 及 BbcD の面積は合せて (m+n+1) Z y なる故に結局溝及小徑の面積の總和は
$$(n+1) y + (m+n+1) Z y$$

となる故に狹義の道敷率 K は次の如くなる
$$K = \frac{(n+1) y + (m+n+1) Z y}{100}$$

これを計算上便利なる形に書き代ふるときは

$$K = \frac{(n+1) \frac{y}{m} + (n+1) Z}{100} \times 100$$

この場合に於ては床地の列は只一つなりしも一般に注意の多數の床地が存在する場合に於ても又この公式を應用するを得べし
例へば今 n=18 m=3 (床の中三尺溝の巾一尺の場合) y=6 間=36 尺 Z=2 尺の場合に於ては K の値は次の如くなる

$$K = \frac{19}{18 \times 3 + 36} + \frac{19+2}{18 \times 3 \times 36} \times 100$$

$$= \frac{19}{54} + \frac{1}{18} + \frac{1}{54} \times 100$$

$$= (0.352 + 0.056 + 0.018) \times 100$$

$$= 42.6$$

次に又例へば n=18 m=2 床の中三尺溝の巾一尺五寸の場合) y=6 間=36 尺 Z=2 尺の場合に於ては K の値は次の如くなる
$$K = \frac{19}{18 \times 2} + \frac{19+2}{36 \cdot 18 \times 2 \times 36} \times 100$$

$$= \frac{19}{36} + \frac{1}{36} \times 100$$

$$= [0.528 + 0.056 + 0.028] \times 100$$

$$= 61.2$$

即床の中三尺溝の巾一尺小徑の巾二尺の場合に於て既に狹義の道敷率は 0.426 となり若し床の中三尺溝の巾を一尺五寸とすれば K の値は急に増大し 0.612 となる故に溝の巾の廣狹は道敷率に非常なる影響を及ぼすものとす

然るに廣義の道敷率に於てはこの外なほ中央道路肥料溜人夫小屋見本園等の如き除地を加算せざるべからず今これ等の除地の面積を R を以て示し床地の總面積を F を以て示すときは一般に廣義の道敷率 K の値は次式によりて求むることを得べし
$$K = \frac{R}{F} \times 100$$

除地の面積 R は苗圃經營者の都合によりて任意に増減すべし値にして一定の數字を以て表はすこと能はざれども假に床地の面積の十分の一を要するものと假定するときは前述第一例の場合に於て K=42.6+10.0=52.6 となり第一例の場合に於ては實に 71.2 なる故に如何に敷地の節約をなすも廣義の

道敷率が五〇%以下に下るが如きことは殆ど想像し得べからず通常の場合に於ては床地の巾を三尺とし溝の巾を一尺として小徑の巾を二尺とするが故に實際に於ては通常 K は五五%即總床地面積の五割五分の道敷率を要すとすは大過なきに近からんか以上は實に養成苗木數に對する所要苗圃面積算出公式を誘導したるに過ぎずこれを實際の場合に應用せんとすれば公式中に存する各因子の數を夫れ夫れ各樹種に就て調査せざるべからずこれ極めて困難なる事業にして多年の経験によりて求めざるべからざれども今暫らく從來の著書雜誌等に現れたるもの及經驗家の説を參照して大体の數字を擧げたるのみ。これらの數字並實際の應用に就ては充分研究の上其結果を述ぶるところあらんとす (終り)

研究

渡鮮一年有半 (承前)

國境にて 坂本光太郎
山地といへば何處の國でも不便なることは言ふまでもないが、殊に朝鮮の山奥其中でも平安北道咸鏡南北兩道の高地帯で鴨綠江に近き處即ち營林廠管内程不便極まる場所はないだらうと思ふ、其處で此山奥に生活する我々の日常の一般を記するもあながち無益でもあるまいから一寸並べて見よう
△仙鏡の生活
場所には東は咸鏡南道に接し北は鴨綠江を隔

て、支那地と界し海拔一千米突云ふ高
地で東西五里南北十里此面積約九萬五千
余町の南社水の大流域である、毎朝出で
ては三角点に登り双眼鏡にてあたりの林況
を望み、參謀本部調製の五萬分一圖に記入
し材積は標準地を取り比較目測に依りて算
定し、或は見取板を首にひっかけ國有私有
區分調査即ち境界査定をなし、ヨボを使役
して標杭を打ち標杭の位置境界線及び地形
を野帳に記入して、夕に歸れば直ちに炊事
軍曹となり夕餉の仕度をする、出來上りた
る御馳走は味噌汁、天張ゆであつて、其原
料は昆布大根干を主として之に素麺を入れ
る事もある、鍋の底をはたけり即ち味噌の
塊に煮干の頭澤山といふのだ、若し未だ此
の如き味噌汁を自宅に於て調製して飲ま
んには恐らく咽喉を通らぬであらう、然れど
も山中に於てはまづいものなしでドク
腹一杯動けなくなる程食する、日中は出で
懸命に山川を駆け廻つた身はお腹へ
の結果此の味噌汁も口中を機嫌よく通
過するのである、否通過させるのである、
其れから其の日の飯米は云へば地米も地
米半搗米にして恰も粉を食ふが如き心地す
る、炊きたてなればまだしも、冷飯と來た
ら最後、咽喉も通過させること容易でない
から一案として右の汁をタツプツと一
流し込み式を以て各自の腹を膨脹させるの
だ、食事が済むと裸体となり湯あびをする
のであるが、其方法といふのは今回新規に

案出したる處の方法であつて、先づヨボの
釜に湯を沸かさせ大きなバカチ(盥大の木
をくつて作りしもの)に移し其の中に這入
つて身体の洗濯をするのである、氷は非常
に冷く到底五分間と中に立つて居ることは
出來ない位で水浴は不可能であるから、斯
る身体の洗濯も一月月に一回ぐらいたから
清々して心地のよいこと大しものだ、只閉
口するのは、(チヨコマン)の蚊軍の襲
來で少し油断すると忽ち全身血の川と化す
部屋の中に蠟燭をともして居るを障子へ雨
の降りかゝる様な音をしてゴトが押し寄せ
るのである、知らずに小便にでも出る時障
子を開けたら大變雪類の如く室内へ侵入し
てしまふ、夕方涼んで居ると自然の音楽が
聞ゆるテッポ、カカツポ……夜に入
れば四隣寂寥として夜色凄く米搗トソの水
槽より流れ出づる水の音より外に何等の刺
激もない、又或る時は遠く貝殻を擦り合ふ
如き蛙聲に淋しき夜の人知れず頼りなさを
我が胸に刻みつけ深夜の寂寞を破る事もあ
る、毎年七八月頃は朝鮮の雨期だそうであ
るが此の年は六月の初めから毎日、降り
み降らすみ氣もち善く晴れた日とては一日
もなく、朝降るか、さなくば晝降るか、少
しの時間を置いては亭主に先立たれた未亡
人が咽び泣きでもして居る様な春雨といは
うか五月雨といはうか、冷たく淋しく降る
鬱陶しい日が續くのであつた、されば朝出
かけて高い三角点に登り山の峯にて雷鳴轟

き巨り、盆を覆す様な沛然たる豪雨に逢ひ
お釋迦様のやうに禪迄もズ濡れになり、
唇の色も蒼く震へて山の頂に二三時間も立
つて居る様な事も數回あつた、幸にして風
邪引いた事はなかつたが風邪でも引くもの
なら大變すぐラツヤとなるから危険だ、
「鴨綠江後節」
「調査隊は山川アツヤ通りつ、夜は月洩
出さつた天幕中ヨイシヨ結ぶ夢路よりアリ
ヤ破れ勝ちよ、憎くや亦ヨイ、降り來る
村時雨チヨイ、と」
さりとして此の北鷄林の人里はなれし田舎に
は我心を樂ましめ、此の體を晴らす方法は
ない、暇な時は食ふ事のみ考へ今日こそは
一ツ可味いものを食はんと一頭を痛めて
夫々料理に取りかゝたが、しばらくして鍋
が運ばれた、蓋を取り去れば中には小豆ゴ
ソソのせんだいがか控へて御座る、其の心
は何かと思へばメリケン粉の團子がゴ
ソソして居る、然し此等のうまさ加減は又
御話にならぬ、しるこ屋のそれよりは優る
こと數等で小豆煮の甘味は倉野屋のしるこ
も跣足と言ふ有様、又或る時はメリケン粉
で餅を作り飯盒でゆで、蜂蜜を付けてば
つく此の味は風月(飴豊)の櫻餅もそつち
のけだ、又或は残飯の干したのを残飯の無
い時は生米を水に浸して乾かし鍋で煎り上
げ醬油で解いた砂糖をまぶしてすくい込む
のであるが、此の味は吉野屋のオヨシも顔
色なしであらう、一々書き並べると垂涎三

尺の恐れがあるから此の位にして御馳走は
預つて置く。而も世は花に酔ひ酒に歌ひ酔
眼朦朧として歡樂に耽る頃吾々はかう云ふ
仙人生活を送るのである、こんな具合でう
まいものと言へば砂糖が先に立ち僅か七八
十日間の滞在中に六七十斤の砂糖を舐るの
である、穴藏に終日雨垂れの音を聞いて居
てもあまり退屈なので一日一里半程下流の
竹下里の憲兵出張所へ總勢四人のものが草
鞋がけで風呂入りに行つた、此時の談に此
奥に近頃鹿が出來すと驚かされたが、數日
前に行つた時は幸か不幸か虎の糞は見たが
遺憾ながら本体は見なかつた、此處で虎を
捕つた此處で虎に捕へられたといふ話も再
々耳にしたので氣持が悪かつた、此處で
内地人といへば憲兵さんばかりで只六七人
それもお互の間は六七里もはなれて外に娛
樂としては何もない只冬の猛獸狩、夏の魚
取り位のものをつ天賦の樂として居るのを思
へば實に同情に堪へぬ、東北の遙か彼方に
は朝鮮で名高い白頭山が巍然として、國境
に聳む前の鴨綠江には日本筏、支那筏が絡
繰として流れて居るのが見ゆる

「鴨綠江後節」

「國境に高く聳ゆる白頭山のヨイシ、峰の
白雪アツヤ。踏み分けてヨイシヨ遙かに見
渡すよアノ滿洲の里を。後に又ヨイ、見
下す新領土チヨイ、と」
調査も進捗して上南社板幕洞と移轉して來
た、此處で終日見るものは山、谷、森林等

で此外には何も眼に入らぬ處大森林は
畫尙暗い程鬱蒼として天を摩するものがある、
朝鮮は秃山多く樹木に乏しいと言ふが
此處に來て見れば思ひ半に過ぐるものがある、
されば猛獸の住所として世評に上るも
無理はない、峯通りを歩いて見ると熊か猪
の仕事ならんか二丁も三丁も開墾した如く
土を掻き起してある、又虎の畏もよく見受
ける、これはあたりの木を倒して兩側を防
ぎ道を付け大きな落し穴を設け其の中に木
の枝を失らして何本も立て、ある、或る時
そんな事とは夢にも知らず通つて行く、先
の一人が危くも片足を踏み落してそれなる
事と知つた、此の外兎、木鼠等の畏も澤山
あるが何れも内地のとは趣を異にして居る
猛獸は一度も出合つた経験はない唯障かを
り、飛び出す位だが、一番始末に終へぬ
のはブトである、袋ベールを被つて手袋を
穿めて居ても標準地調査の時など野帳持つ
て居る手は山藪の木の様になる事がある。
第二にはダニである筈で拂ふと言ふ一寸
形容が大きい過ぎるが五匹六匹は洋服にはみ
ついて居て知らずに居ると必ず一日に一ツ
二ツは喰ひつかれる、臍、罌丸をやられる
と針ではちるも痛し一番閉口する第三には
アブであるが丁度密蜂が分蜂する時其群の
中に立つて居る様である、脚絆といはずズ
ボンと言はず十羽も二十羽もとり付く一度
叩くと三四羽殺せる、第四にはマムシであ
る一日に三四匹見ぬ事はなかつたが幸にし

て一度も之れには噛みつかれなかつた、前
申した通り交通は不便で隣へ一里、豆腐屋
へ三里と云へば随分淋敷處であるが此處は
三つの星も一度に見る事が出來ぬと迄言は
れ居る、丁度管の穴から空をのぞくと思
へば大概は想像がつく、川を渡る時は彼の
ロビンソンクルソーの昔話の中にある様
な原始的の丸木船で二三人を定員として彼
私の渡船をするのである、此邊の家屋は皆
土と木ばかりで造られて此外には藁一本も
釘一本も見出すことは出來ない、此れに柱
を用ひない直徑六七寸の長い丸太を井桁積
にして屋根には土を上げ壁は内外共牛糞等
の混じた泥を塗つて作り雜穀其他のもの、
貯藏箱は大きな木の中を焼き取つてこれに
底をつけたものを用ひて居る。此等の人間
が如何なる生活をして居るか云へば多く
は火田生活をして居る、此中水草を追ふて
歩く所謂浮浪の民即ち純の火田生活者とな
ると大森林を切り倒し之れに火を放ちて其
跡へ燕麥、馬鈴薯、唐黍、蕎麥、粟の如き
ものを作るものであるが肥料を施すことを知
らぬので五六十年の後は地味が衰へる、す
ると又奥へ入り新に火田を開墾するといふ
有様に朝鮮の大森林は此れがために空し
く炭と化し或は立枯れの状態にて朽ち果て
居る慘狀は實に目も當てられぬものがある
。彼等はかく粗放的な農業であるから一
戸當約數町歩の面積を耕して僅かの收穫
を得るのであるが其の耕作法は如何なる高

い山までも如何に急峻なる山腹を言へども、牛二頭曳きの鋤を使用して耕作して居る、其常食物は右の農作物が主である俗に天道様と米の飯とは何處にも在ると子供の時からよく聞いて居たが此處は天道様はあるが悲しい哉米の飯はない我々もよく途中で宿つたり夜中道に空腹を耐へかねて馬鈴薯をゆでさしたり燕麥或は粟を炊かして臭い漬物の水をぶつかけて匙で咽喉を押し上げる様にして吞み下し空腹を醫して一夜を明した事もしばしばあつた、これにても日頃の食物は大抵聯想されるでせう。ヨボチビに寝て困るのは如何なる夏の暑い時と雖も空気の通はぬ様な部屋の中に居て、暑い温突でヒンデ袋の中へ這入つて豆煎にでもされる心地して寝なければならぬ苦しさは到底内地に居る人の想像出来ぬことであると思ふ

「鴨綠江筏節」

「北鮮の鳥も通はぬアア山奥でヒンデに喘られ。コリヤヨボチビのヨイシヨ、脊中の焦げつくアアリヤオレドレで、シラミ亦掻き、破る夢チヨイ、それにつけても此處に一つ天恵とて言はふか、野外殊に火田の休耕地には見るからに頸の落ちる程美味しい朝鮮蕎麦が足の踏む處なき迄實つて居る、月日の経つにつれて髪も伸びるあまり醜い風をしてゐると我々イルボンサラミ(日本人)の品位に關るといふので、鉄やバリカンを持ち出して理髪屋が初まる一名鑑別と稱して半ばより以下を刈り廻し

血を被つた様な頭の左へ風の道路を開鑿するもあれば、真中より分けた芭蕉の葉も出來上る或は角刈とか稱して丸い頭へ角を付けるために櫛の代りに五分角の櫛を定規にして、横の方へ盛上げ工事を施して頂上へ風の運動場を造るもあり、或は山へ行つて虎に出逢ふても大丈夫に五分刈(一名階段刈)と名づけて虎の皮を戴く人もある、之れが即ち頭隠して尻をかかすの愚を免れないのだ阿々

「鴨綠江筏節」

「床屋さんわたしや口説て言ふのじやないがヨイシヨ、後短くコリヤ前長くヨイシヨ真中チヨンボリよアア、左分付よいきな亦ハイカラさんにしておくれチヨイ、とかくする程に南社水事業區の調査も了へ七月十八日となり豫定通り歸途に付いた。江界より高瀬船にて禿魯江より鴨綠江を新義州迄下る考であつたが或事情の爲め照川迄徒歩にて晝は熱いから可成朝の涼しい時に多く歩む方針を取り、夜明けより起きては飯盒片手に一日十二里余歩んだ日なきては途中で電柱と丈くらべて居たり、橋の上で一休したまゝ一時間位も知らずに眠つて居た事もあつた。照川にて船を備ひ其の名も清き清川江を下る事にした、水少く水勢強にして石高く船は川の真中で石に乗り上げて方向轉換をするやら、或は高瀬を通過するとき波は船を越えて打ち込み再三晝寝の夢を破られ下るに従ひます、流

れは遅く日はじりりと照りつける、船頭共はしばしば水飛び込んで上つてまた漕いで居たが、飽きて來るも何處でも勝手に船を着けて酒を飲みに行つては一時間位は遊んで來る、一日乃至一日半にて新義州迄漕ぎ着ける筈の約束であつたがそんな事で二日も六ヶしいとおもはれたので自分等も二人宛交代で手に豆して漕いだが其甲斐なく新義州より一里半程上流にて二日目の日も暮れた、これでは新義州へ着くには十二時過ぎになるので其處にて船を捨て荷物と背負はせて十時頃新義州へ着き久し振りに電燈の光を拜み流車の笛の音も耳に入り待ち兼ねて來たアイスクリームにもありついてやうう、文明の空気を呼吸するこゝろが出來七月末日眞黒き星を提げて綠滴るヤマナシやアカシヤに包まれた新義州に歸り着いた(未完)

琉球アルプスの山嶺より

園原 頓狂

近時山岳趣味の向上と登山熱の流行より至る處、私稱アルプスの名現出す、我琉球アルプスは、琉球カーブに於ける、諸群島中の最大島、沖繩本島の北部一帯古生層の山谷より成る、十萬餘町歩の、森林地方にして、明人の所謂山原省、里稱ヤンバルと言ふ。植物辭典の索引を検するのとき、ヤン

バルを冠せる植物名多きを見る可し。是多く黒岩、田代氏等により、此地方に於て、新に發見せられたる、ニユウスベンニスナリ、琉球アルプスは、海拔一千尺を出でざる、小丘なるを以て、降電凍氷の事實なしと雖も、霰に似たる凍雨なるもの襲來す。最低も華氏四十度を出でず。季節風卓越すれば漫に寒冷を覺ゆと雖も、吹き去れば風日和煦に日陽はつこに適し、遊山に宜し。實にや山茶赤くつじ白く、楡紅葉尾花に交りて無名の草木或は咲き、或は實熟し、推茸は峯に生じ、柯の實尚落も残りて、鶯の初音は未だ聞かぬと小島歌ひ野猪走る、誠に春冬秋相交りて來るの感あり。時や正に植村の好季節、法螺を吹いて(實物なり近海に多く産す)人夫の督勵し、くす、いぬまき、りうきりまつ、等の造林に従事す。本主に流行らぬ樹のみなり。

今如何、君の董育を受けし子弟、吾同僚間に多く皆其實技に精しく、教授の懇切なりしを説く。君の創始せし名護山演習林は、明治聖帝の御紀念林と成り、三百餘町歩の造林完成し、名も明治山と改め、雜竹林茅原は、漸く松、樟の美林と化しつゝあり、岩久君は我輩小學校時代よりの同窓なり、坪倉君に前後して、鹿兒島大林區より縣技手に轉じ、一年に充たすして去る。よく談じよく飲みたりと聞く。君の監修せし公有林野整理事業はすでに第一期の實行を完了し、更に第二期の計畫に遷れり。兄等の創始せし縣有林は既に八百町歩の造林を了り我輩今佐手山の主任として造林の事に従ふも、其成績意の如くならざる慚愧の至なり大城朝詮氏は源何山にあり。縣有林五千町歩の經營主任として、老來益々頑健頭髪禿げ去りて後に霜毛を留むるに過ぎざるも、長軀彌々長くダンチャのステッキを振つて琉球アルプスに馳令しつゝあり。岩久君今郷國にあり素封家なりと云へば自家の山林の經營に従事せるが、近況承り度し、琉球カーブの北端薩南の海中に、海拔六千尺九分の高峯をなし、屋久杉の名を以て知らるゝ屋久島あり、秋より春にかけて殘雪解けず、夏時は雲霧横はりて實に南島の雄鎮たり。山谷重疊八重岳の稱あり、五萬町歩の國有林を有し、巨大なる老杉族立其間又多額の、やまぐるまを産す海洋中の孤島なるより、本土に見ざる特殊の植物に富み、南

洋系琉球系植物の南限界を示すと共に、本土植物の南限界をなせるもの多く、近時發見せられたる新種多し。予は本島の南島アルプスの稱を與へんとす。南島アルプスに足を入れし同窓に、オールド杉本君あり吾輩種子島にあり、教壇に立つて筆記の受賣りをなす眞最中、窓外聲あり、頓狂先生頓狂先生と、南島に頓狂の名を知るものある筈なし、怪しい哉と窓外に目を注げば短驅長面美髯の一紳士嫺然顎を振りつゝ立てり、驚いたり珍客我杉本オールドならんとは筆記を投げて相迎へ、次第を問へば、やまぐるまにて製糖事業の技術員として、屋久島に來りしも、事業主と意見合はず、卓を擡つて歸るなり信州男兒の意氣旺なるを喜ぶ。滯泊二夜にして去る。君今岐阜縣廳にあり。今春年賀狀に添へて同縣山林會報の購讀を希望し、六年分全部を寄贈し、更に新刊を贈る可き報す。有り難い哉。渺たる十六頁の小雜誌而も天下の林業記事を網羅して余すなきの感あり。定價郵税共タツタ二錢安いの哉、編輯者中に必ずや奇才ある可し、今春より林業國と改題す。愈々天下の雜誌になる可し、益々發展を祈る兄の來島當時屋久島に於て樟造林に従事し居し林學士曰許永次郎氏は今本縣主任技師たり同所は既に六百町歩の造林をなし全窓により華樟腦の製造をなしつゝあり。予が種子島在任中、山下藤一君郡技手として來任相往來し、南島林業改革の事に従は

んとせしも、君志を得ずして長子を擧げて熊本に去り、我輩去漸く島に倦まれて、君に前後して渡球したり、今や琉球...

御料林視察之記(承前)

(完、一月卅一日稿)

紀行

九月七日 金曜日 横井 生 午前七時早くも旅装をこめて、のへて、曇りがちなる王瀧の空を後に、帝室林野管理局王...

米國製(大)九噸半代價八千二百圓 日本製(小)八噸 代價五千九百圓...

蘇林作業

喬林皆伐作業 三、五二二、六〇五尺貫 神宮備林蓄積 一、六六〇、三六二尺貫

阿寺官行伐木開始 明治二十二年官有より、御料地に編入し 同年より官行伐木を開始し、本年に於...

輕便鐵道 明治二十四年より現在延長七哩

新設改修費 九、五〇圓(一間に付) 軌間 二呎

平地勾配 1/20 最急勾配 1/16 最緩勾配 1/430

最小半徑 九間 當所運材順序

イ、山落 木會式留、修羅、棧手等によ

ロ、輕便鐵道自動により乗り下げ、空車

ハ、三村式自動鐵索

一回輸送量 七石位

一石の運賃 五錢

ニ、野尻森林鐵道

馬車ニテヒキ上グ(十石位) 石の運賃 八錢

一貨車 約四十二石 運賃 名古屋迄 四十二錢

大阪まで 六十三錢 東京まで 七十錢

造材費 十八錢 雜費 六錢

本年度の事業

伐木面積 十三町八反六畝歩

伐出材積 三萬一千三百七十五石

山落し着手 四月

軌道輸送終了 十一月

官吏、兼勤、二名 專屬、二名

總頭代人 七名 人夫 九十人

伐木地の狀況

本年度事業地は字阿寺入本谷字コガヤ谷の

左側に在り、一區劃の約半區劃にして

阿寺本谷の右方に在り、臨時に橋梁(一つは

昨年度架設の分を費用し、一つは本年度新

設を要する分)を架し、線路を敷設し阿寺森

林鐵道に連絡せしめ、當年度伐出木材の搬

出をなすものなり。當代木地は、本谷沿岸

左に該區劃の地況及林況を詳記せん 區劃 一四五 地況 三角形にして西は尾を登り、

砂小屋會所

建設年度 明治三十二年及三十七年 建坪 百四十五坪二合

經費 五百三十三圓八十九錢五厘 別室建坪 十三坪七合

經費 七十二圓三十九錢

吾々一行は朝食をすまして、先輩小池兩氏

及于村氏の案内により、伐木事業所實地見

學のため會所を出發せり。時恰も天候に曇

り、大雨沛然として降り來り、事業所に行

く能はず、やむを得ず近所の砂小屋に入り

て晴間を待つ事一時間有餘。行くこと數町

にして事業所に至り、運材の實況を視察す

る事はしにして、再び會所に引かへして
晝食を認め、會所を辭して歸途につく。七
哩有餘の軌道を野尻に出で、製板所を參觀
し、夕刻の列車にて無事歸校せり、終に臨
みて本旅行中案内其他の勞をとりし、先
輩諸兄及其他の方々に深く感謝す。(終り)
「本報は十二月紙上に記載の筈なりし
も紙面の都合上今月號に載せたり」

學校便り

○始業式、大正七年一月廿一日午前十時始
業式を舉行し職員生徒一同講堂に相會し申
候校長よりは特に本年「於ける覺悟に就て
懇々戒諭さるゝ所あり十時半終了致候
○兎狩、二月九日例により學校附近の雜本
山に兎狩を催し前後二回狩り立て二三頭を
認めしも足場悪き險山の事とて遂に逸走せ
しめ候は遺憾の事にて候ひき
○紀元節、午前九時紀元節拜賀式を舉行致
し候夫れより當日は擊劍及柔道の各進級仕
合を行ひ進級者優勝者には夫々賞品を授與
し午後三時過、散會致候詳細は大會記事に
譲り申候
○校長視察、七宮校長は二月十二日より二
十三日迄關西方面學事視察として管外出張
被致候
○辭令、北村教諭は昨年十二月廿六日付を
以て高等官六等特選の辭令に接し、矢野書
記心得は一月卅一日付を以て書記に任じ六
級奉給與の辭令に接し候

○入學試験期日、本校入學試験期日は從來
四月四日の處今年より四月一日と改正され
候間受験者は右注意肝要と存候
○擊劍部記事、Y 生
二月十一日紀元の佳節を以て武術大會は
開催せられぬ
數十年來稀に見る寒氣を物とせめて我が抗
原の健兒は二旬餘りの寒稽古に鍛錬したる
鐵腕を奮いつゝ意氣揚々として午前十時半
講堂に參集し西澤顧問先生の開會の辭あり
里見劍道教師の訓辭ありて後同教師審判の
下に仕合をなせり取組勝負次の如し

- (水野)宏 ○(小池)常 ○(野口)武
○(小池)政 ○(小林)愛 ○(霞)上
○(木村)政 ○(原)中 ○(吉田)武
○(岡西)武 ○(田)中 ○(原)秀
○(立道)武 ○(榎)山 ○(西)村
○(星)武 ○(水)口 ○(高)橋
○(吉田)正 ○(小)松 ○(村)上
○(吉田)正 ○(水)野 ○(山)崎
○(矢)加 ○(中)村 ○(宮)下
○(星)加 ○(仲)谷 ○(米)久保
○(井)上 ○(丸)山 ○(伊)東
○(北)川 ○(島)田 ○(今)井
○(古)根 ○(唐)澤 ○(今)井
○(三)村 ○(井)上 ○(今)井
○(月)田 ○(池)口 ○(内)田
○(細)蓮(本校) ○(内)田(本校)
○(加)藤(卒業生) ○(長)谷川(宮越青年會)
○(高)橋(宮越青年會) ○(神)崎(御料局)
○(今)井(本校) ○(米)倉(本校)
○(近)藤 ○(藤)澤

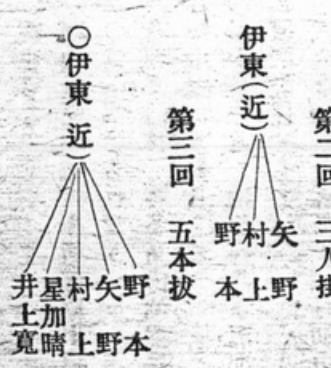
此の他本校生徒内田君と今井君と數番
の稽古仕合ありたり
次に新愛知新聞社より寄贈されたる賞牌及
校友會賞牌を賞品として高點試合を行ふや
部員全部肉踊り奮湧きて更に活氣を添へぬ
則ち次の如し
乙組 水野宏 ○○ 米倉巧 ○○ 三村
○ 小池政 ○ 水野謙 ○ 池口
○ 小池常 ○ 榎山 ○ 細窪
○ 小林愛 ○ 水口 ○ 今井
○ 岡西 ○ 甲組 ○ 内田
○ 野口 ○ 矢島 ○ 今井
○ 星 ○ 中村 ○ 吉澤
○ 田中 ○ 米久保 ○ 伊東
○ 小林武 ○ 井上 ○ 米久保
○ 西村 ○ 林 ○ 伊東
○ 原秀 ○ 仲谷 ○ 米久保
○ 山中 ○ 藤澤 ○ 伊東
○ 榎山 ○ 丸山 ○ 伊東
○ 深澤 ○ 吉澤 ○ 伊東
○ 吉村 ○ 伊東近
○ 水口 ○ 島田
○ 小松 ○ 唐澤
○ 吉田正 ○ 三村
○ 米倉倉 ○ 井上
○ 小松

校友會賞牌一箇 乙組高點者 米倉 巧君
新愛知新聞社寄贈賞牌一箇
校友會賞牌一箇 甲組高點者 三村善三君
校友會賞牌一箇 全 次点者 今井忠雄君
かくて午後五時仕合を終へ賞品授與式あり
て後西澤先生の閉會の辭ありて散會しぬ當
日小學生徒及び近在の人々參集して近年稀
に見たる盛會なりき會員諸兄今後尙更に多

柔道大會記事

大の努力を傾注し吾部の前途をして校運と
共に永遠盛大ならめん事を。
二月十一日紀元節の佳節を以て我柔道部
進級仕合大會は催されぬ我部員二十有餘名
の者は昨年本部設置以來熱心稽古を勵めし
が殊に一月廿一日より二十日に至る寒稽
古間は一層努力を重ねしを以て今や平日の
手腕を發揮すべき時至れりとなし骨鳴り肉
躍るの感に堪へず午前十一時合圖の鐘響き
渡れば一同整列、小貫教師より一場の注意
あり直ちに仕合に取り懸りたるか取組左の
如し

- 第一回 三本勝負
(1) 水野宏 ○ ○ 矢野 星
(2) 岡西 ○ ○ 米山 ○ ○ 村
(3) 原 ○ ○ 花村 ○ ○ 三
(4) 水野謙 (7) 草間 ○ ○ 野本
(5) 山崎 (8) 丸山 ○ ○ 伊東
(6) 古畑 (12) 井上 寛



三本勝負終りて星加晴雄君(受)を小貫教師
(取)との固の形あり次に井上寛一君と伊東
近良君との投の形あり、右終りて小貫教師
と演武者一同の乱取あり之にて仕合を終
へたるが技術の進歩著しきものあり各自相
應の技量を發揮せるは喜ぶ可し益々部員の
精進を祈る受賞者左の如し
校友會賞牌一箇 野本美嘉君
新愛知新聞社寄贈賞牌一箇 伊東近良君
寄宿舎 だより

あり一同愉快に卓上の山海の珍味を健啖し
種々の余興をなし八時頃萬歳聲裡に閉會致
候、とかくする内に冬期休暇となり又母の
膝下に歸り候、故郷にて三句を夢の間に過
し一月二十日歸舎致し一同揃つて翌日の朝
食に向ひたる時は萬感胸にせまり何事も云
ひ難く「御機嫌宜しう」位にてすまし候
中庭の積雪は尺余に及び寒氣凛冽用水來ら
ず數日困窮致し候が鉛管に修理に加へてや
う／＼水にありつく様に相成候こゝに一つ
變りし事は以前の自炊制度が請負制度にな
りたることに候それが爲め炊事員の手も省
け都合も宜しく相成候得共不馴の点もあり
満足とは申兼ね候但し日を経るに隨ひ追々
改善の運びに至らんかと竊かに喜び居候
如月三日は日曜節分にて未明より雪華紛々
と散らつき來り舎内は何となく活氣立ち候
夜になりて各室に二合つゝの豆を分配せら
れ心ばかりの越年祝ひ致し候食ひ残りの豆
にて鬼拂ひにかゝり「鬼は外福は内……」の
聲勇ましく一時は騒然として底止する所を
知らず如何に憚惡の鬼も逐電致せし様に察
せられ候學年味試験も眼前に迫り候事とて
寒氣を物とせせず元氣旺盛にて勉強いたし
居候勿々

會員消息

○長谷部兵治君 岐阜縣技手より岐阜縣屬
に任せられ内務部山林課勤務を命せらる
○和田守衛君 今回愛媛縣宇摩郡林業技手

に任せらる

○野知里慶助君 今回敷原出張所を辞し修學の爲上京せられたり

○石坂季治君 客冬高田輜重兵第十三大隊第一中隊に入營せらる

○田中榮一君 秋田縣北秋田郡七日市小林區署に赴任せらる

○武久貞一君 客冬十三月初山口縣に轉任技手、並に林業技手に任せらる

○平田久良治君 東京にて高等學校入學檢定試験に應じ首尾克及第せられたる全氏は一高一部志望にて來七月更に上京受験すべく目下準備中の由來信あり

○古畑七三君 鳥取小林區署に赴任せらる

○温井誠一君 鳥取縣林業技手なる同君は二月六日上京の途次母校を訪問せられたり

○岐阜縣下蘇門會 同會は本年一月十日第一回を小坂町に開き高論快談盛會を極めし由、會者は宮澤清輔、中田辰雄、石曾根四郎、今井眞二、近藤幸吉、喜多村弘の六君也

○長野市蘇門會 長野市に於ける蘇門會は本年早々西洋軒に於て新年宴會を催し安藤林務課長を始め倉科、齋藤(正雄)島田(勘四郎)篠原、稻葉、丹澤、柏澤、丸山(嘉一郎)藤原(幾喜)等の諸君參會大氣焰を擧げし由、送り來れる寄せ書の中に、

大正七午歳の正月蘇門會の新年宴會席上にて
午歳や午飲馬食蘇門會 珍竹山人
端唄(安藤珍竹讀み込み) 飄々乎

我願ひやつと叶うて安心の世帯を持つた嬉しさよ、いざこれからは離れごと藤の花ほど絡みつく固き心は現はれて今年しや珍らし松竹の門の飾りもしたわいな
此他珍什も多きやうなれど醉筆淋漓として讀み難ければ略しつ
○喜多村明君 昨年未除隊せられ帝林木會支局上松出張所伐木掛に任命せられたり
林友代領收報告 原 潔君

謝恩金領收報告 (第五回)
征矢野書記分
金五十錢 (現) 松本清 太君
金五十錢 (現) 中島要 人君
金三十錢 (現) 白木老 雄君
金一圓 (現) 高峯傳 治君
各務傳 六君
長谷部久 郎君
田中泰 吉君

大場教諭の分 (第四回)
金五十錢 (現) 岡西 猛君
金壹圓 (現) 白木老 雄君
金二圓 (現) 高峯傳 治君
各務傳 六君
長谷部久 郎君
田中泰 吉君

累計 拾六圓拾錢 (第四回)
加藤書記の分
金二十錢 (現) 白木老 雄君

金二圓 (現)

累計 七圓四十三錢
福山教諭の分 (第四回)

金五十錢 (現) 白木老 雄君

金一圓五十錢 (現) 高峯傳 治君
各務傳 六君
長谷部久 郎君
田中泰 吉君

絡計 八圓七十三錢
高樋君弔慰金領收報告(第六回)
金五十錢 (現) 中島要 人君
累計 五十一圓

○渡邊知則君の征矢野書記謝恩金五十錢、大場先生謝恩金一圓五十錢及び加藤書記謝恩金五十錢は重複記載し金高に差異を生じ候間今回訂正致置候

